

---

# 私のSDGs 実現企画・提案書

---

下記のテーマにつきまして、企画・提案いたします。

---

## 記

---

テ ー マ 長岡地域における救急医療システムの検討

---

テーマの詳細 長岡地域における第1次救急、第2次救急医療ともトラブルもなく巧く実行されている。第1次救急は開業医による輪番制で、第2次救急医療は長岡赤十字病院、長岡中央総合病院、立川総合病院の3病院の輪番制である。

---

提案の理由 全国各地において救急医療システムが不十分で患者の「たらい回し」が問題になっている。長岡地域では、昭和 56 年頃から上記システムを実施し、県内は勿論、全国でも注目されている。

---

現状の問題点 ①医師の働き方改革(時間外労働年間 960 時間以内)  
②開業医の老齢化(長岡では 68 歳以下)

---

今後の課題 ①病院勤務医の夜勤制限から2次救急の継続の可否  
②開業医の老齢化が進むと1次救急ができなくなる

---

添付資料

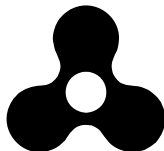
---

そ の 他

---

以上

＼きになるがここにある／



まちなかキャンパス長岡  
machinaka campus nagaoka

氏名: 星 榮一

## 長岡地域の救急医療システムの検討

星 榮一

### はじめに

全国各地において、救急医療システムが不十分で、患者の「タライ回し」（救急搬送困難事案）などが問題になっている。

長岡地域においては、救急医療システムが良好に運営されていると私は認識していた。しかし、果たしてその実態は如何なものかと調べてみた。

### I 長岡地域の救急医療の歴史

長岡市の救急業務は、昭和 37 年 8 月 10 日にロータリークラブから救急車 1 台の寄贈を受け、救急隊員 2 名で開始したのが始まりである。昭和 40 年 8 月 1 日に「長岡市救急業務実施要項」が制定された。昭和 43 年 9 月 1 日から、長岡赤十字病院・長岡中央病院・立川病院・神谷病院の 4 病院により外科系日曜当番制を開始した。昭和 49 年 6 月 2 日に保健所で、内科系の長岡市休日急患診療所を開始した。昭和 52 年 4 月 29 日に外科在宅輪番制診療を開始した。昭和 53 年 4 月 1 日から休日急患診療所は柳原分庁舎に

移転した。

昭和 56 年 9 月 6 日に長岡休日・夜間急患診療事業を開始した。この時から外科系も赤十字病院・中央病院・立川病院の 3 病院の輪番制で全国で初めての休日夜間急患診療を始めた。昭和 63 年 4 月 17 日より、休日・夜間急患診療所は長岡市健康センターに移った。さらに、平成 26 年 5 月 13 日に現在の「さいわいプラザ」に移った。

### II 長岡地域の救急医療の現在の体制

長岡地域とは、長岡市、小千谷市、見附市、出雲崎町の 4 市町間で、平成 21 年 12 月に長岡地域定住自立圏を締結している。

#### A 1次救急（風邪や腹痛などの比較的軽度な救急患者）

かかりつけ医院、中越こども急患センター（さいわいプラザ）、休日・夜間急患診療所（さいわいプラザ）、婦人科、眼科、耳鼻科（市内開業医の輪番制）

#### B 2次救急（入院や手術が必要な重症な救急患者）

立川総合病院、長岡赤十字病院、長岡中央総合病院が輪番制で診療する。

### Ⅲ 各救急部門ごとの問題点と課題

#### A 1次救急

かかりつけ医院（内科・外科）は、休日・夜間診療している所が少ない。

中越子ども急患センターは市内小児科開業医と市内病院の小児科医 28 名の輪番制で特に問題はない。令和 4 年の受信者は 1110 名で、1 日平均 3.8 名だった。コロナ禍前の令和元年までは 1 日平気 15 名前後であった

休日・夜間救急診療所は内科系・外科系の開業医の輪番制で、内科は 47 名、外科は 23 名で担当している。68 歳以下ということになっているが、本人の希望により高齢者も担当している。

内科受診者の一日平均は、令和元年までの休日は約 80 名で、コロナ禍の令和 4 年には約 20 名と減少していた。休日の外科受診者は令和元年までは約 10 名で、令和 4 年は約 8 名であった。平日夜間の受信者は令和元年までは約 5 名で、令和 4 年は約 1 名に減少した。

婦人科・眼科・耳鼻咽喉科在宅当番医は、婦人科 6 名、眼科 10 名、耳鼻科 6 名で輪番制で担当している。特に問題は無いよう

ある。

#### B 2次救急

##### a 担当 3 病院の見解

現状のシステムで特に問題ない。令和 24 年 4 月より「医師の働き方改革」が始まるが、病院の医師の人数がある程度満たされているので、問題は無いだろうとのこと。

##### b 救急車を配車する消防署の見解

現在 15 隊（1 隊；救急車 1 台、救急隊員 3 名）で毎日展開している。年間約 12000 回出動している（1 日平均 33 回出動）。特に問題は無いが、救急車の不適切使用が問題である。消防署が主催して 2 か月毎に長岡地域救急懇話会を開催して各病院と連絡調整をしている。

##### c 1次・2次救急システムを調整している医師会事務局の見解

長岡地域の救急医療システムは良好に運営されていて、特に問題はない。長岡地域のシステムは県内他地域のモデルになっている。これには開業医、赤十字病院、長岡中央病院、立川病院の深い協力があるからである。

長岡市でも、休日・夜間救急診療所と「こ

ども急患センター」に年間約1億円の補助を出している。また、2次救急を担当している3病院にも年間合計1億2000万円の補助をしている。

#### IV SDGsの観点から見た救急医療

この「長岡地域の救急医療システム」はSDGsのゴール3「すべての人に健康と福祉を」とゴール11「住み続けられるまちづくりを」に対応している。

しかし、未来永劫これを維持できるかと言うと、誰も保証はできないだろう。人口の減少、協力病院の経営、長岡市の補助金、その他諸々の変化が生じ、このシステムが維持できなくなるかも知れない。少なくとも現在、このシステムが良好に機能していればよしとすべきだろう。問題が生じた時に当事者が協議して解決して行けば良い。

#### むすび

- 1 長岡地域の救急医療システムについて検討した。
- 2 長岡地域の救急医療は、1次救急・2次救急ともに良好に運営されている。
- 3 現在のところ、大きな問題や課題はない。
- 4 コロナ禍になって1次救急患者は半減している。
- 5 このシステムは県内各地域のモデルになっている。
- 6 これには、各開業医、2次救急病院、消防救急隊、これらを連絡調整をしている医師会事務局の大きな協力が重要である。
- 7 長岡市も相応の補助金を毎年負担している。

## 参 考 文 献

- 1 小川貞雄：長岡市医師会休日診療の歩み、その1、ぼんじゅーる、昭和63年4月
- 2 小川貞雄：長岡市医師会休日診療の歩み、その2、ぼんじゅーる、昭和63年5月
- 3 長岡市医師会編：長岡市医師会医史、平成2年
- 4 小川国男：好きになる救急医療、第3編、講談社サイエンティフィック、平成28年
- 5 長岡市保健課編：救急医療ハンドブック、令和4年版
- 6 長岡市医師会編：長岡休日・夜間急患診療所事業報告、令和4年11月
- 7 長岡市医師会編：長岡市中越こども急患センター事業報告、令和4年11月
- 8 長岡市医師会ホームページ：長岡市の救急診療、令和4年
- 9 長岡市消防本部編：消防年報、令和4年
- 10 長岡市消防本部編：消防統計概況、令和4年
- 11 国谷裕子監修：国谷裕子と考えるSDGsがわかる本、文溪堂、令和元年
- 12 功能聡子監修：60分でわかるSDGs超入門、技術評論社、令和2年
- 13 川廷昌弘：未来を創る道具 わたしたちのSDGs、ナツメ社、令和3年